

〔日本絵画名品展によせて〕

渡辺始興筆「金地山水図屏風」について

大和文華館の所蔵する「金地山水図屏風」は、渡辺始興が六曲一双の金屏風に水墨で山水を描いた作品です。この作品は表裏に描かれており、裏面は紙本水墨画の「芭蕉竹に仔犬図屏風」です。始興の金地山水図屏風は、ロサンゼルス・カウンティ美術館の作品をはじめ、現在、四作品が確認されています。通常、屏風の周囲には縁をとりませんが、これらの作品には縁がないかわりに豪華な飾金具を左右の上下の隅と中央に取り付けています。このような布の裂を用いない仕立てには、何か特別な意図があったのでしょうか。

四作品には一双の横に長い画面を通して、一つの景観が描かれています。いずれも画面の下方に近景の集落を見下ろし、湖あるいは大河の水面を隔て、画面の中段にある対岸の光景をほぼ水平に眺めています。中央に水面が広がるものと、左右に分かれるものがあり、大和文華館とロサンゼルス・カウンティ美術館の作品は後者に属します。襖絵では、例えば、南側と西側の襖がこのように連続することがありますが、一双形式の屏風作品では、画面の中央が左右に分断されるため、あまり類例がありません。しかし、この画面構成を

とれば、近景を大きく取り上げることができ、画面内の遠近の対照が強まり、描く画題の範囲も広がります。大和文華館の作品では、中国の山間の集落を描いています。唐時代の文人、王維が山荘を営んだ朝川の山谷のような、特定の土地を描いた可能性もあります。この作品は始興の金地山水図屏風の中でも、他の作品とは作風が異なります。狩野派の影響はあまり認められず、中国絵画から直接に学んだ跡が窺えます。近景を中央に向けて急な奥行きをつけてまとめ、対岸の山々を斜めに引っ張るように連ねて、近景との均衡を図っています。中央の峯から対角線状に景観が展開する構図には、始興の知的に画面を構成する感覚が顕著に表われています。

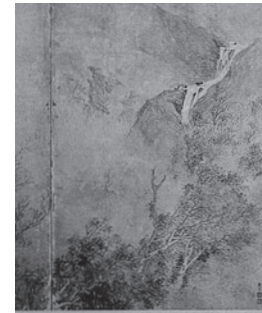
円山応挙が始興を高く評価したことが知られていますが、円満院に所蔵される「雨中山水図屏風」と「芭蕉童子図屏風」が、大和文華館の「金地山水図屏風」、「芭蕉竹に仔犬図屏風」を参考していることは明らかです。両作品ともほぼ同じ寸法の二曲一隻の屏風です。落款も等しく、明和二年（一七六九）四月の年記があります。この年に応挙は三十七才であり、円満院門主、裕常の許で画技の修養に



始興筆 金地山水図屏風・部分



始興筆 芭蕉竹に仔犬図屏風・部分



応挙筆 雨中山水図屏風・部分

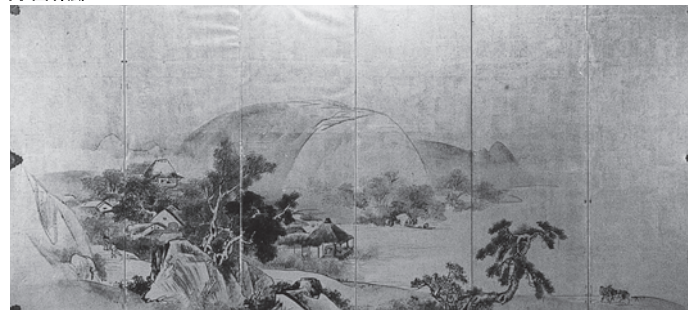
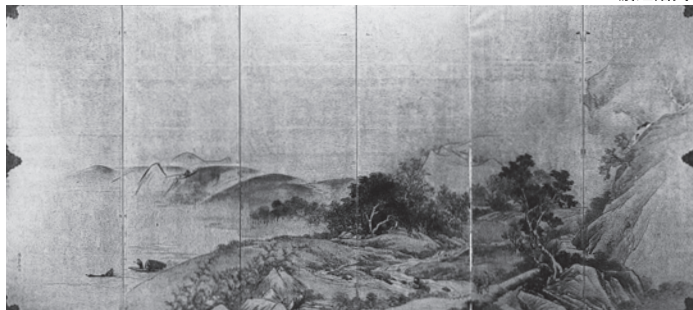


応挙筆 芭蕉童子図屏風・部分

励んでいた時期にあたります。裕常は二条吉忠の子で、後に二条綱平の養子になりました。公家に生まれ育った裕常は、近衛家の御用絵師であった始興の作品を知っていたはずで、おそらく、応挙は裕常を通して始興作品を学び、大きな影響を受けたと思われる。しかし、始興の「金地山水図屏風」と応挙の「雨中山水図屏風」には、二人の芸術性の違いも明確に表われています。応挙作品の筆致は細

かく、墨の諧調も滑らかです。霧が立ち込め、雨風が降りしきる光景は、夏の夕立を思わせます。明るく照らし出された始興の画面とは異なり、湿潤な柔らかい大気に包まれた画面には、すでに応挙の画業の方向が示されています。（中部義隆）（「雨中山水図屏風」、「芭蕉童子図屏風」の挿図は、『日本美術絵画全集 第22巻 応挙／呉春』昭和52年集英社刊より複製させていただきます。）

渡辺始興筆 金地山水図屏風



季刊 美のたより No.138

平成14年4月5日

発行 大和文華館